

出侍りぬ、其秋我兄の一子世をはやうせり、又我兄も大にやまひつき給ふ、其折ふし我主知慎に命じて、帝陵の御在所を考へしめ、まさに諸陵に事あらんの御あらましなれば、いそぎ我兄にかくと告奉りぬ、我兄やまひの床にありて手をあはせ、聖君あり、賢佐有、時なる哉、知名死すとも骨朽ざらんと感涙をおとし給ふ、又先考先妣を拜して、其教誨によりて、此心をけふにたもちて、此時にあへりと大によろこび給ふ、知慎心におもふ、此大善事をなす人いかで福壽を得ざらん、疾病平安日をさしてうたがふべからず、且又子孫も出來て必繁茂せんと、心肝に銘じてたのもしかりしに、いく日ならず、八月朔日四十二歳にてうせ給ふ、嗣子さへなくていふかひなき事ともなり、翌年寅の八月に、知慎主命により禁廷にのぼりぬ、爰かしこ帝陵を見奉れば、皆艸の周垣を新に作れり、人にとへば東武の尊命有てかくのごとし、世に有がたき御事也、國家の御祈禱、又此上有べからず、昨日今日までも、土人等登臨の處として、牛馬に草かひ侍りぬ、まことに今おもへば淺ましき事なりしといふ、さてこそかくやと思ひて、有難きに涙とゞまらざりし、又翌年卯五月、我主君知慎をして、此一冊并一紙をかゝせ給ひて、是なんぢ兄弟のま心より出てかく事ゆきぬ、爾も一通を寫して家につたへよ、又我家乘にも書載せよと宣ひぬ、我兄世にまし／＼なばと思へばとゞまらぬ涙也、さるによりて一通を繕寫して、まづ我兄の牌前に供へ、且又我子孫に傳也、もろこしにて陵墓を修せし事、蕭統の文選にのせ、又宋の帝の陵を修補せし胡元の時趙人有、子孫あらましかばと思ふもはてしなき憾や、今年大和の國宇多の住人我同僚と成侍る、九月廿七日その人のがりまうでけるに語ていへらく、をとゞし帝陵の御たづね有て某も役にされ、大和路の舊蹟悉く巡り侍りしが神武天皇の陵、畝傍山の東北におはします、田の中にて亥る人